

寺院に出現した 巨大なムーミンラ

この夏、ロンドンのセントポール寺院で、先鋭なドイツの現代美術作家レベッカ・ホルンのインスタレーション「ムーミンラ」とタイトルが付いた大作で、人が最も多く出入りする寺院西口の床に設置されていた。

円形の鏡面仕上げにした表面がゆっくり回転して、のぞき込む自分自身と壮麗な天井の構造が底知れず眼下に広がり、ちよつとした錯乱を催させる。通常見ることのない視点から、一挙に大伽藍の構造体を見せる、すぐれてアーティスティックな仕掛けであり、海外からの観光客を含め多くの人たちを引きつける好企画であった。

これはサウスバンクのハイワードギヤラリーで行なわれたレベッカ・ホルン回顧展の関連事業として企画されたもので、同時期に開催されていたロンドンシティ・フェスティバルの参加イベントともなった。実験的な表現が美術館を超えたまったく異なる空間で、おそらくは現代美術とは無縁のおびただしい数の観客を魅了する抜群のアイデアであった。

イギリスには、国際的に活躍する美術家が数多くいることは言うまでもなく、助成機関や会場等、彼らの活動をサポートする公的システムも整い、ロンドンの美術界は活気に満ちている。しかし、本稿では最近のロンドンにおいて活躍が際立った海外作家のプロジェクトを取り上げ、美術館の活動とその国際的役割、そして人的交流が何を

もたらすかについて考えてみたい。

テイトモダンの刺激的な 展示空間に集まる人々

セントポール寺院からミレニアムブリッジを渡って川向こうにあるテイトモダンには、火力発電所をそっくり美術館として利用したもの。それは閉じられた無機質な空間ではなく、要所要所に設けられた窓からはテムズ川、セントポール寺院、シティが望め、今自分がどの時代のどこにいるのかを思考させる巨大な装置といつていい。建築デザインは、国際コンペを勝ち取ったスイスのヘルツォーク&ドームロンである。

周知のように2000年に開館したテイトモダンは、最初の年に500万人の観客を動員して世界を驚かせた。この開館を誰よりも喜んだのは、戦後荒廃の一途をたどってきた地元サザクの住民であった。雇用は激増、地下鉄が開通、さまざまな街は活性化し、ファッショナブルな変貌を遂げたのである。テイトモダンは近現代の国際美術のセンターであり、メインエントランスを入ったところに、タービンホールという誰でも入れる大空間がある。開館時におけるアメリカ人ルイーズ・ブル

過激な変革も伝統的手法

テムズ河畔の美術館から

さくらい たけし
桜井 武

ブリティッシュ・カウンシル・
アドバイザー／美術史家



オラファー・エリアソン「気象プロジェクト」(2003年)
 ライトが当たった半円のスクリーンと天井部の鏡面が「太陽」を現出させ、壁からはドライアイスの「霧」が吹き出し、クールな現代建築の空間に「気象」が生み出される
 写真提供：筆者

ジョアの鉄の作品(そのひとつ巨大なクモ「ママン」は今、東京の六本木ヒルズに設置されている)以来、ここでは毎年1人の作家を指名し、大がかりなインスタレーションが行なわれてきた。

とりわけ、昨年行なわれたデンマーク出身のオラファー・エリアソンの「インスタレーション」「気象プロジェクト」は、その劇的な効果で人々を驚嘆させた。エリアソンは、テイトモダン開館以来、最大規模の装置を据えつけた。壮麗な日没を思わせる太陽と、壁から噴出する霧、そしてすべてを写し出す鏡の天井。テーマはイギリス人に日常最も身近な「気象」(天気)である。

老人から幼児まで、多数の観客は連日、床に横たわったり、ダンスを踊ったり、実にさまざまな方法で太陽と霧、そして天井に映った自分たちを楽しんでいた。すべての国民と、国境を越えたすべての人々に開かれた、国立美術館の一大スペクタクルであり、会期中100万人が訪れたという。

テイトモダンはクールなカテドラルと呼ばれるが、その大空間は静かな瞑想の場ではなく、新たな美との出会いと興奮の空間となった。ここでは現代美術の作品が発する音楽とか騒音、観

客の声とか足音など、さまざまな音が美術館の重要な一要素となっている。

このタービンホールでのシリーズは、感動を分かち合い、不思議な連帯を生み出す祝祭的效果がある。入場無料のタービンホールが、世界で最も刺激的な展示空間であるという評価がここで定着したのである。イギリスを代表する国立美術館なのに、開館時から積極的に海外の作家を招へいして、スケールの大きな仕事を委嘱しているのである。これは、古いものを生かしながら過激な要素を導入して若返るといって、イギリスの伝統的手法でもある。

美術史に新たな光を当てた 大型展覧会

蛇行するテムズ川の先にテイトブリテンがある。そこではこの春、ブロックバスター(大量動員を見込む大型展)「ターナー、ホイットスラー、モネ」展が開催された。この展覧会は、2004年カナダのトロントで立ち上がり、第二会場のパリのグランパレでは50万人を越す観客が訪れ、今春のテイトブリテンは国際巡回展の最終会場であった。

欧米で最も人気の高い3作家の展覧会は、興行的には成功間違いなしの安

さくらい たけし ●慶應義塾大学仏文科卒業。シカゴ・アート
インスティテュート留学を経て、1971年よりプリティッシ
ュ・カウンシルにアーツ担当官として勤務。著書に『英国美術
の創造者たち』など。主な展覧会企画に現代美術のシリーズ
「今日のイギリス美術」展（82年）、「イギリス美術は、いま」
展（90年）、「リアル／ライフ：イギリスの新しい美術」展
（98年）のほか、「ターナー展」（86年）、「ヘンリー・ムーア展」
（86年）、「テート・ギャラリー展」（98年）、「イン／プリント
展」（2003年）など。1991年に大英勳章MBE授与



全な企画であるが、第一級の代表作を
集めようとしたら至難の業である。ま
た、その評価額たるや天文学的な数字
となり、海外巡回のための保険が企画
実現に向けて障害となること必至であ
った。

しかし、イギリスのJ・M・W・タ
ーナーからアメリカ出身のジェーム
ス・M・ホイットスラー、そしてフラン
スのクロード・モネへの影響をテーマ
にした大規模な展覧会は前例がなく、
美術史に新たな光を与えるものと期待
された。

実際、この展覧会で出品されている
印象派の命名ともなったモネの「印象
日の出」（1872〜3年）は、ターナ
ーの「紅の日没——川辺の街」（183
0〜40年）等と比べてみると、限りな
くターナーの世界に近いことが納得で
きる。モネと親交のあったホイットス
ラーは、テムズ河畔のターナーが住んだ
家の近くに居を構え、ターナーが見た
同じ風景を眺め、黄昏のテムズ川とロ
ンドンを描き続けた。その一連の作品
が、ターナーとモネと並んで陳列され
たのである。

本展は彼らの代表作百余点で構成さ
れ、テーマは水、大気、光。水は川や

運河であり、大気
に立ち上る水蒸
気、そして霧でも
ある。3人の天才
画家が描いた霧に
揺れ動き微光に輝
くテムズ川が本展
の基点となり、セ
ーヌ川、そしてヴ
ェネチアへと劇的
に展開される。

ターナーの生き
た産業革命の時代にすでに大気汚染は
始まり、19世紀後半には深刻な様相を
呈していた。だが、太陽光が汚染された
霧を通過するとき、めくるめく色彩変化
が生じ、この近代都市ロンドンの特異な
景観はモネをとらえて放さなかった。
そして晩年にモネは、ウォータールー
橋や国会議事堂等、テムズ川をテーマ
にした輝かしい大傑作群を生み出すこ
とになるが、本展はその代表作をまと
めて見ることで見ることのできる稀有の機会とな
った。

優秀なキュレーターと 国際的な支援ネットワーク

展覧会内容はもちろんであるが、こ



大型国際巡回展の「ターナー、ホイットス
ラー、モネ」展が開催されたテイトブリテン

の巡回展でさらに注目すべきは、その
企画の成り立ちである。この展覧会を
発想したのは、西洋絵画の主要コレク
ションを保持するパリのオルセー美術
館でもロンドンのテイトブリテンでも
なく、トロントのオンタリオ美術館で
あった。歴史の厚みと膨大なコレクシ
ョンを背景としないカナダの美術館が
イニシアティブを取り、ヨーロッパの
美術館を納得させたことが興味を引く。

この企画の主軸であり推進力となっ
ていたのがホイットスラーの世界的権威
であり、オンタリオ美術館のキュレー
ター、キャサリン・ロックナンであっ
た。持たざる美術館の、学識的にもコ
ーディネーターとしても傑出したキュ

● 公共施設の独自性を守るイギリスの法制度

イギリス国立美術館、博物館の構造について簡単に触れてみたい。最も古い例は大英博物館であるが、1753年に「大英博物館法」が制定され、その存在理由、目的が明記され設立。その後、1963年に「大英博物館法1963」により巨大化した大英博物館全体を新たに規定しなおし、現在にいたっている。最初に法律が制定されて、博物館として出発したことが注目される。

一方、ほかの国立美術館であるテイトギャラリーやナショナルギャラリーなどには、「美術館博物館法1992」という別の法律があり、国立肖像画館、ウォーレス・コレクションとともに、その目的、組織がおのおの明確に規定されている。各館ともにその成立の歴史、性格、目的が異なるが、政府から補助金を受け、最高決定機関は各々の独立した理事会であり、入場は無料であることが共通している。基本的に美術館、博物館の独自性、独立性が法律(Act)によってしっかり守られているのである。

美術館・博物館が文化・メディア・スポーツ省(DCMS)の系列であるのに対して、植物学の研究機関であり園芸の殿堂でもあるキュー植物園の所管組織は、環境・食料・地方省(DEFRA)で、入場は有料である。そして法律的には「国民遺産法1983」によって規定、保護されている。

21世紀になって、イギリス政府は「地方美術館のルネッサンス」や「美術館・博物館と21世紀の生活」等の新しい政策を次々と発表し、変化する時代への対応を促し、国立と地方美術館の協力、パートナーシップ、ネットワーク化を積極的に進めているが、各館の強力な独立性はゆるぎない。ここでは存在理由と展望がはっきりとしているゆえ、経済性と効率を優先させた美術館の統廃合とか、管理者の変更とか、入札制度の導入等は当面ありそうにはない。(筆者)



大英博物館。博物館としての存在理由や目的まで、法律によって明確に規定されている

レーターの本領発揮であった。これは優秀なキュレーターの存在が、すぐれた国際巡回展の実現にいかにも重要であるかを改めて示している。

その後、ターナー、ホイットスラー、モネを専門とする欧米のキュレーターや学者たちによる国際チームが結成された。オルセー美術館(展覧会場はグランパレ)とテイトブリテンも主体的に参加して巡回展が具体化していく。

専門家集団の研究と緊密な共同作業は7年にわたったが、さらにカナダ、フランス、イギリス政府の支援を得て3カ国の国家補償を取りつけることにより、高額な保険料の負担からこのプロジェクトは開放されたのである。こうしてようやく寶石を集めたようなこの展覧会は実現した。

さて、最後に美術館でも博物館でもなく、植物園での破格のプロジェクトについてである。場所はロンドン南西部に位置するロイヤル・キューガーデンで、「ガラスの庭」と題したガラスアートの見事な大インスタレーションが展開したのである。色鮮やかなガラス作品が、典雅なヴィクトリア朝のガラス建築内で植物群と共存し、また広い池に浮かんだたくさんの彩色ガラス

本ではまだ確立されていない。また日本の国際展において、この欧米の国家補償システムは、数少ないケース(例えば国立西洋美術館での「ターナー展」、東京都美術館での「テート・ギャラリー展」等)を除いては、なぜか使用された例をほとんど見ない。

9・11以後、国際的な展覧会の保険料は高騰し、一方で貴重な作品の借用料も吊り上げられ、内容のすぐれた大型展の実現は極めて困難な状況にある。しかしこの展覧会は、国際的ネットワークと高度な専門知識をもつキュレーターの共同作業で、そんな問題を見事にクリアしていた。

キューガーデンに咲いた 極彩色のガラスアート

デイル・チフォーリ「ガラスの庭園」
世界を代表する植物園のキューガーデンに、ガラス製の不思議の植物が飾られている。来年1月15日まで



球が映え、この歴史的植物園の相貌を変えてしまった。

作者は、アメリカのアーティスト、デイル・チフォーリ。興味を引くのは植物や花の群れに見え隠れし、ときに強烈な存在感を示している作品のいくつ

かが、「イケバナ」とか「ニイジマ・フロート」と題されていることである。チフォーリは、1989年に初めて日本を訪れ、生け花に出会う。とりわけ植物の生命力と水をたたえる花器との絶妙な関係性に衝撃を受け、「イケバナ」と題された独自の形態が生み出されていった。伊豆諸島の新

島では、漁業用ガラスの浮き球からインスピレーションを得て、それは一連の「ニイジマ・フロート」の制作に導かれる。大温室内は高温多湿であり、植物が放つ濃厚な匂いがたちこめている。時間の推移とともに変化する自然光、温度、湿度、芳香、そしてチフォーリ作品と共鳴する色彩の乱舞は眩暈を誘うものであった。

その規模の大きさ、複雑な構造、鮮やかな色彩効果にもかかわらず、チフォーリの制作方法は吹きガラスというハンドメイドの、極めて伝統的で素朴なものである。古い伝統工法と、歴史が重層する環境を徹底的に生かしながら、新しい展開を試みる。それが今回のチフォーリとキューガーデンによる「ガラスの庭園」プロジェクトの基本コンセプトであった。

アメリカのダイナミズム、青年期に学んだヴェネチアの絢爛、そして日本の様式美が融合して、このキューガーデンでしかあり得ない大規模なインスタレーションが生み出されたのである。この壮大な企画は伝統的キュー植物園の概念を変えるばかりでなく、展示のスケール、国際性、奇抜さ、自然とアートに対する深い問題提起等、その革

新性で従来の美術館や博物館へのすぐれた挑戦ともなった。

* 以上のように、ロンドンのテムズ河畔にある美術館の、果敢な試みと変貌を足早に見てきた。外国作家ならではの切り口をもつホルンやエリアソン、そしてチフォーリのインスタレーションは、すぐれたインターナショナルな企画が文化や言葉の差異を超えて人々を結びつけ、連帯感や祝祭性も創出することを示していた。

会場が美術館を超えることにより、普段は美術と無縁な多くの人々にも現代の魅力的な美術に触れ合う機会を与えていた。また、アーティストと担当キュレーターが会場の性格や歴史を鋭く読み取るにより、展示会の新しい地平が開ける可能性を見ることができたのである。

そして「ターナー、ホイットラー、モネ」展は、今後のブロックバスターのあり方と有効な戦略について、また美術館が緊密な国際的ネットワークをもつことの重要性を明かし、これは日本の展覧会状況にも大いに示唆するものがあつた。